

自律し、自国の価値を高めるとき。 人も国家も独自の判断力が問われる

●ニッポンと世界の現在と未来

苛烈な国際情勢を生き抜く
そんな緊張感がインテリジェンス感覚を磨く

誕生間もない明治の若き国家は、リーダーが瞬時でも判断を誤れば、たちまち欧米列強に呑み込まれてしまう情勢下にいた。それゆえ自ずと情報への感覚が研ぎ澄まされていきました。しかし、一転して戦後の日本は、明治という時代がもっていた張り詰めた空気を喪失してしまっただけのように思います。

戦後の日本は、軽武装、経済重視を標榜し、冷戦下で安全保障の足らざる部分をアメリカとの同盟で補いました。その選択が間違っていたわけではない。だがアメリカとの同盟によって失ったものも大きかった。国家の舵取りまでワシントンに委ねてしまった面を否めません。独自の情報網を世界に張り巡らし、

それに拠りながら凍とした交渉を行うことが少なくなりました。過去半世紀はそれで済んだのかもしれない。だがアメリカも絶対的な存在から相対的な超大国になっていくはずは。今の

後の日本は、必然的にアメリカの庇護から嵐のなかに出ていかなざるをえません。東アジアでは中国が台頭し、21世紀は「中国の世紀」になろうとしています。日本は、長い間、超大国の傘の下にあって、大切な国家の舵取りをアメリカ任せにしてきた。その結果、外交や安全保障、大災害への対処では、政治のリーダーシップが惨めなほどに衰えてしまった。温室のなかで惰眠を貪っていると、知力、体力は衰えるばかりです。今の日本はもう一つの温室効果ガスにやられてしまっています。

そして、日本の教育もまた長い間、温室暮らしを続け、制度疲労を起こしています。

手嶋龍一氏

外交ジャーナリスト・作家

Teshima Ryuichi_ドイツのNHKボン支局長を経て、1997年から8年間にわたってNHKワシントン支局長をつとめる。9・11同時多発テロ事件に際しては、11日間連続で昼夜放送を担い、その冷徹な分析は視聴者から圧倒的な信頼を得た。2005年にNHKから独立後発表したインテリジェンス小説『ウルトラ・ダラー』とその姉妹編に当たる『スキハラ・ダラー』は、総計で40万部を超えるベストセラーに。『インテリジェンスの賢者たち』『外交敗戦』など著書多数。慶應義塾大学教授。



●10年後の大学の役割は？

揺るがない知力・体力を
鍛え上げる場として新たな
社会のニーズにこたえよう

地下鉄のベンチでお弁当を食べ、塾のはしこをしている子どもたちがいます。偏差値を最大の拠り所に大学を目指す。でも、偏差値は過去から現在までの基準にすぎない。決して未来の指標じゃない。そんなものを後生大事にしているのですか。ハーバード大の研究所にいたとき、ロースクールとフレッチャー外交大学院に同時に通うアメリカの若者と仕事をしたこと

があります。国際的な危機のシミュレーションに一週間泊まり込みで臨んだのですが、何日徹夜してもここにこしながらやっている。彼らの知力と体力には驚かされ、超大国で鍛えられた若者の実力を思い知りました。日本の若者も未来に挑んでほしい。慶應義塾の大学院でインテリジェンス論を教えています。社会人学生も多い。学ぶことの意味を自覚し、自らを鍛えたいと思う人たちとすると楽しいですよ。社会に出てリアルな世界に触れた人たちが学校に帰ってくることで大学に新たな血を注ぎ込んでほしいと思います。

3

日本の国際的地位の低下と大学